



「箏(そう)の音色に魅せられて」 - 夫に寄り添い奏でた半生 -



みやぎ たま え 1927年(昭和2年)
千葉県千葉市生まれ、
南小岩在住。

夫は箏の演奏家

一般的に「こと」と呼ばれ、「琴」という字が使われますが、琴は別の楽器です。「箏」と書いて「そう」と呼ぶのが正式なんです。

昭和58年3月、江戸川区総合文化センターの落成記念に、私は主人と一緒に箏の演奏をしたんです。「編曲松竹梅」「編曲千鳥」「ロンドンの夜の雨」、鼓や尺八も合わせ50人ぐらいでの大合奏でした。

昭和61年には、主人が江戸川区の第1回文化賞をいただきました。ありがたいことです。平成3年3月、小岩アーバンプラザのこけら落としは、主人と私と私の妹も一緒に演奏しました。その4ヶ月後の平成3年7月、主人は急性白血病で他界してしまいました。69歳でした。主人は宮城慎三。生田流の宮城道雄先生の弟子で、箏曲演奏家であり作曲家でした。

結婚したのは昭和30年、私が27歳、主人が33歳の時です。そのころ、主人はNHKや東宝歌舞伎に出演していました。歌舞伎の舞台に合わせた箏の生演奏を行うんです。また、箏の通信教育の講座で使用する教本と演奏テープを作る仕事もしていました。全国的に名を知られていたもので、主人に箏を習いたいという方が各地から集まって来んです。お稽古のために飛行機や新幹線に乗って来る地方のお弟子さんもいたんですよ。

箏に夢中

音楽は小さいころから好きでしたね。小学校1年生の時、音楽の授業でクラスみんなの前に出て、お手本として歌ったことがありました。そのことを学校から帰って母に話したら、「大きくなったら音楽の勉強をするといいわね」と言ってくれたことを覚えています。

ずっと欲しかった箏を私が手に入れたのは、木更津に住んでいた18歳の時。戦後すぐの昭和20年秋のことです。子どものころ、いとこが箏を習っているのを、うらやましく思っていたんです。だから「県庁の近くの古道具屋に箏が売り出されていたよ」と姉に教えてもらおうと、次の日すぐに買いに走ったんです。中古でもいいから手に入れ

たい一心で。食べるものさえ満足にない時代、楽器を売っている店なんてめったになかったんです。それから箏の教室に通うようになりました。

教室には家計に余裕のある家の子が多く通っていましたね。うちは父が国鉄に勤めている普通のサラリーマン家庭。貧しいわけではなかったものの、経済的な余裕などなくて、私は演奏会の時に着る着物も持っていなかったから、卵を手みやげに叔母のところに行って、着物と帯を貸してもらって着たことを覚えています。

当時、私は看護婦として働いていました。習い事は、お花、お茶、洋裁、英会話など、たくさんしていました。あれもこれもやりたかったんです。箏もあくまでも趣味の一つとして始めたんです。それが、病院の休憩室に箏を持ち込んで、勤務開始前や休憩時間に練習に打ち込むくらい、夢中になりました。

ずっと憧れていた箏をだんだん弾けるようになるのがうれしくて。練習が本当に楽しくて。仕事以外の時間は練習に打ち込んでいたわけですけど、それをつらいと感じたことは一度もありません。どうしたらもっときれいな音が出るんだろう、もっともっと美しく繊細に奏するにはどうしたらいいんだろうと、いつの間にか箏のとりこになっていたんです。でもそのころは、まさか箏と一生付き合うことになるとは思っていませんでした。

家を持ちたい

看護婦を志したのは、自分が病気がちだったから。小学校入学までに肺炎を3回も患いました。実母も病弱で、私が小学6年生の時に亡くなったんです。小学校卒業後、国民学校高等科に2年通いました。卒業後は、新宿駅から近い鉄道病院で寮生活をしながら、午前中に仕事をし、午後は看護婦資格の勉強をするという生活を送りました。鉄道病院の後はお礼奉公として千葉駅の構内にあった千葉鉄道診療所で働いたんです。

その後、錦糸町にある病院に勤めるようになりました。その時は、千葉市に3畳の部屋を借りていたんですけど、部屋で箏の練習をしていたら、大家さんの子どもが「うるさいよ」と言いに来たんです。気兼ねなく、思いっきり

練習したい。千葉から錦糸町に通勤するのも大変で、自分の家が欲しいと思ったんです。

住宅金融公庫のことを知り、昭和27年、25歳の時、30年ローンで東小岩に約40坪の土地を購入して、家を建てました。小さな平屋で部屋は3つ。ひと部屋には自分が住んで、2部屋は貸しました。半紙に「部屋貸します」と書いて貼り出したら、住宅難という時代背景もあって、借り手はすぐに見つかりました。台所とトイレが共同で、賃料は3千円。当時の相場ですね。2部屋分で毎月6千円の収入がありましたから、ローン返済はそれほど大変じゃなかったですね。

そのころ、小岩駅の周辺はのどかな蓮田や戦時中に建物の強制疎開でできた空き地がありました。大通りを少し入った路地では蛇の目傘を作っていました。当時、江戸川区には傘屋（傘づくり）がいっぱいあって、傘を広げて干している光景がよく見られたものです。



◆箏を演奏する宮城さん(左端)

たちを集めて、病院の一室を借りてお稽古したり。

その他に主婦業もありましたし、演奏家の主人をサポートする仕事もありましたから、毎日忙しかったです。主人の手を傷つけないように、NHKや東京宝塚劇場に箏を運ぶのは私の仕事だったんですよ。

主人は、それこそ箏より重いものを持たない人。奏でる音色は一流でした。母親は長唄、姉2人も箏をやっていましたから、音楽一家のなかで才能が育ったんですね。でも、才能があっても、努力家でないとい流にはなれません。マッチ箱を横に置いて、1曲練習するたびにマッチ棒を1本取り出し、マッチ箱が空になるまで練習していたんです。

連れ添って36年。振り返ってみると、私はあの人が死ぬまで縁の下の力持ち。芸一筋で他には何もしない主人を支える日々は大変でしたけど、愚痴を言う暇もなく、無我夢中で突っ走っていた気がします。

子どもたちに夢を託して

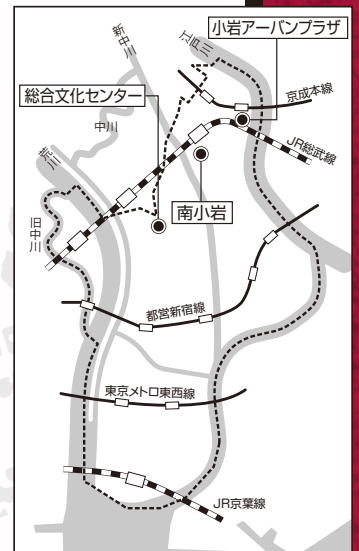
東小岩にある江戸川女子中学校・高等学校で箏の指導を、昭和33年から45年間続けました。最初は「クラブを作らせてください」と私から学校に頼みに行ったんです。箏を広めたいという気持ちと、女子校の生徒さんに箏の楽しみをぜひ知って欲しいという思いがあったからです。

その甲斐あってやることになったわけですが、学校には必要なものは何もなかったんですよ。だから、道具を全部こちらから持ち込んでスタート。主人を見送った後も、教室に、学校に、とめぐるしい日々でした。

78歳の時、学校の講師は妹に引き継ぎました。その後は、ボランティアとして江戸川区立下小岩小学校のすくすくスクールで、1年生から6年生までの子どもたちに週1回箏を教えています。箏を見たこともさわったこともない子ども、男の子も女の子も大勢参加しています。箏に親しむ時間をみんなで楽しく過ごして、私のほうも子どもたちの元気なパワーをもらっているんですよ。

子どもたちには、箏を学びながら、きちんと挨拶のできる人間になって欲しいと思って接しています。教えられる。できないのは教えていないから。子どもたちをちゃんとした人間に育てるのは大人の仕事ですよ。

「いい人がいないか」という相談を受けて、箏の教室の生徒を推薦して、キューピット役を果たしたことは何回も。7組がゴールインしています。世話好きかもしれませんね。体力が続く限り、まだまだがんばりたいと思っているんです。



縁の下の力持ち

自分の家は持ったけど、親にも家を残してあげたいと思って、よく働きました。主人は、箏を教えてお金を稼ぐより、自分自身が箏の練習をしたり、曲を作ったりする時間を大切にしたい芸術家。お金には無頓着で、わが家の稼ぎがしらは私でした。

30歳の時、南小岩に中古住宅を買って、25歳で建てた東小岩の家を親に譲ったんです。当時、女性は自分の名前を表に出さないのが普通でしたから、家は主人名義。後に南小岩の家を建て替えた時も、銀行ローンの名義人は主人で、私は保証人。やっぱり女性は裏方なんです。

看護婦を辞めたのは、結婚から3年後の昭和33年です。当時、女性の職場はまだ限られていたかもしれません。看護婦は社会にとって大事な仕事ですから、やりがいがありましたよ。でも、結婚した時から、いずれ主人を支えるつもりでいたんです。

私自身も箏の教授の資格を取って、たくさんの生徒さんを抱えていたから、看護婦を辞めて家計が苦しいということはありませんでした。「箏を習いたいという人が何人かいる。部屋を貸すから、来て教えてほしい」と近所の方から電話がかかってきたり、地元の病院でも習いたいという看護婦さん